

『嵐が丘』再訪—登場人物が担うもの—

小田夕香理*

Wuthering Heights Revisited: Characters' Roles and Meanings

Yukari Oda*

Emily Brontë and Catherine Earnshaw, the heroine of *Wuthering Heights*, are not identical, but the readers have a persistent desire to believe that the author of the novel is a spiritual as Catherine. Though modern literary criticism cautions against using the literature to understand the writer's life, in this paper, I will revisit the kind of criticism which is now regarded as outmoded, but which nevertheless continues to reflect the kind of relation many readers have to the novel, to re-consider its characters' roles and meanings. This will illuminate the link between Emily Brontë and her inner life described in *Wuthering Heights*.

Keywords: エミリ・ブロンテ, Emily Brontë, 嵐が丘, *Wuthering Heights*

I

エミリ・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) がヴィクトリア朝の批評家に好意的に受け入れられなかったことはよく知られている。彼女の文体は未熟であると評価され、作品の持つ激しさや非道徳性は厳しい非難の対象となった。当時の『嵐が丘』批評として最も有名なものの一つに、『ジェーン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) や『シャーリー』 (*Shirley*, 1849) の作者としてすでに名声を馳せていたエミリの姉、シャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) が、1850年発行の『嵐が丘』第二版に付した「序文」(‘Preface’) がある。シャーロットは批判の的となった妹の名誉を守るために筆を執ったのだが、彼女が選んだ手法は、批評家たちが『嵐が丘』を非人間的であると指摘したことを受けて、作品の非人間性をエミリ個人の性質から引き離すことで彼女の人間性を弁護するというものであった。シャーロットは「序文」で、ウエスト・ヨークシャーという田舎暮らしゆえに一家が世間との関わりが乏しい状況にあったことを、妹が一般的な道徳観に囚われない物語を生み出した理由として挙げた。そして、エミリは自らの想像力に任せて『嵐が丘』を創作したにすぎず、‘she did not know what she had done’ (326)¹ と主張したのである。しかし、シャーロットの意図に反して、彼女の「序文」はエミリの内向性を読者に強く認識させるという結果を生んだ。シャーロットは、『嵐が丘』を、そして『嵐が丘』を書いた妹のエミリをどの程度理解していたのだろうか。シャーロットが「序文」で用いた手法は、エミリの内面と作品の両方を彼女が理解しきれなかったことを示しているの

* 教養部

ではないだろうか。

ブロンテ家の伝記については、新たな発見や考察とともに、毎年のように新作が登場する。ブロンテ家の人々の人生は、現在も人々の関心を集めて止まないのである。しかし、このような状況にあっても、エミリの性格は、強調されているのではないかと思われるほどに極めて内向的に描かれる場合が多い。²元をたどれば、この内向的なエミリ像を生み出したのは他でもないシャーロットの「序文」であり、この「序文」の影響下で書かれたエリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) によってそれが定着したのだが、これらが実際のエミリ像をある程度正しく伝えているとすれば、エミリの人間性を弁護する立場を取ったシャーロットは、姉妹という近しい間柄にあったとはいえ、世間に受け入れられるイメージを生み出そうとする際にはかなりの努力を必要としたのではないだろうか。エミリの作品の独自性が、一般大衆にだけでなく彼女の家族にでさえも理解の難しいものだった可能性は高い。他者との交流を好まなかったとされる彼女の性格を鑑みると、家族とも分かち合えない部分を内に抱え込んだエミリが自らの内に慰めを求めるようになったとしても不思議はないだろう。エミリにとっては、作品だけが自己を表現できる場であったとも考えられる。³エミリが自分の目的のために『嵐が丘』の登場人物を生み出し、ヒロインであるキャサリン・アーンショウ (Catherine Earnshaw) に彼女自身を投影した可能性は、わずかではあっても否定することはできないのである。

無論、エミリとキャサリンを同一視すべきではない。多くの読者は『嵐が丘』の作者をそのヒロイン同様に精神的であると理解しており、伝記作品においてはエミリの性格を説明するために『嵐が丘』からの引用を用いる例が多く見られるが、現代批評は作家の人生を考察するために文学作品を直接的に利用することに警鐘を鳴らしている。もしこの警鐘を意識するなら、私たちは客観的で批評的な見地からエミリの作品にアプローチする姿勢を貫かねばならないだろう。しかし、それでもやはり作家エミリとその内的世界の関係は暗示的で意味深く、『嵐が丘』を考察するにあたって無視することのできない側面であるという事実には変わりはない。また、キャサリンの思想の中にエミリ自身の精神世界の一部を見ることができると仮定するならば、他の登場人物にも何らかの役割があるのではないだろうか。キャサリンがエミリの自己投影の対象としての役割を担うのであれば、同様にヒースクリフやロックウッドといった他の登場人物にも、エミリの内的世界との関係性を見出すことができるかもしれない。

本論では、現代批評によって時代遅れとされた伝記的批評にもあえて言及し、主な登場人物がエミリの精神世界で果たす役割を考察する。そして、エミリ・ブロンテと『嵐が丘』の関係、また、作家と作品のあいだに介在するものを再考し、依然として内向的なエミリ像が読者を魅了する理由にも迫ってみたい。

II

エミリの思想を最も顕著に表しているのは、キャサリンの独創的な精神性であると言われる。

キャサリンは、家政婦であり物語の語り手でもあるネリー(Nelly)に、ヒースクリフ(Heathcliff)への愛を次のように語る。

My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath—a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff—he’s always, always in my mind—not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself—but my own being.”
(64)

キャサリンにとって、ヒースクリフは彼女自身よりも大切な存在である。彼女のヒースクリフへの愛は、地上の物質的な要素に左右されることはない。物質性から解放されているが故に、彼女の存在は地上のいかなる制約からも自由なのである。登場人物の役割を議論するという目的上、本論ではキャサリンの精神性についての詳細な分析は行わないが、地上の物質的な愛情表現に囚われたヒースクリフがキャサリンの精神性にたどりつくことで物語に幕が下りるというこの作品の筋書きには留意しておきたい。

キャサリンとヒースクリフの関係は、物質性を凌駕する激しさをもって展開されるがゆえに「普通ではない」ものとして片付けられることも多く、彼らの人間性を評価しない批評家も多い。ドロシー・ヴァン・ジェント(Dorothy Van Ghent)は、彼らが人間らしさに欠ける以上、彼らの行動や感情、苦痛や死について、人間のものであると理解するための苦労は必要ないと述べており、⁴F・H・ラングマン(F. H. Langman)は、彼らが人間でないために道徳的な問題を適用するには及ばないとしている。⁵また、サンドラ・ギルバート(Sandra Gilbert)は、ヒースクリフをキャサリンの自己の代わり、あるいは分身であるとしている。⁶しかし、キャサリンとヒースクリフが人間の特徴を示していることには疑いようがない。キャサリンは、しばしば感情を爆発させて周囲を驚かせるが、これを人間らしさの欠如と捉えてしまうのは行き過ぎであろう。ヒースクリフの冷酷な振る舞いについては、アーノルド・ケトル(Arnold Kettle)が‘[o]bviously we do not approve of what he does, but we understand it; the deep and complex issues behind his actions are revealed to us’⁷と述べるように、道徳的な説明が可能である場合が多い。ヒースクリフの行いは確かに悪魔的な印象を与え、『嵐が丘』初期批評の多くも彼を非難したが、彼が繰り広げる復讐劇の要因は作中に見出すことができる。ヒースクリフの行動を正当化するには難があり、彼の心理分析に関してはまた別の課題として取り組む必要のある複雑さがあるが、愛するキャサリンが彼を裏切ってエドガー(Edgar)と結婚したこと、そして、その後の彼女の早逝が彼の行動を大きく左右したことに疑いの余地はないのである。

そこで、ヒースクリフの復讐劇のプロセスを、作家エミリの精神世界を端的に表したキャサリンの精神性にアプローチする人物に与えられた試練であると考えてみてはどうだろうか。ヒースクリフは、最終的にはキャサリンの精神性の理解者ともなる人物であり、その意味では彼をキャサリンの分身のような存在であると捉えることもできる。しかしながら、エミリが彼女の考え方

を徐々に受け入れる第三者を描くこと、つまり他者に受け入れられる図式を実現することを目的としたと考えるならば、ヒースクリフはキャサリンとは別の存在である必要があり、彼らを分身同士とする考えは成立しない。作家エミリは、キャサリンとヒースクリフという二人の異なる人間の葛藤と相克を描くことで、自らの「理解者」を求める願望と彼女の精神世界とを表現したのではないだろうか。

III

ヒースクリフがキャサリンの世界観を次第に受け入れていくのとは対照的に、作中の他の登場人物が彼女の精神性を肯定することはない。エミリは、彼女の考え方を理解する人物を求めたのと同時に、それが世間の人々には理解し難いものであることを認識していたのではないだろうか。『嵐が丘』には、ヒースクリフに託された作家エミリの願望とともに、彼女の諦念が表されている可能性がある。

使用人のジョセフ (Joseph) は、虚栄心の強い、威圧的な老人である。彼の極端なカルバン派の説教は作中にしばしば登場するが、マリアン・ソーマーレン (Marianne Thormählen) は ‘Joseph is not in any sense a fixed point in the book; he has not independent values and convictions beyond that of his own superiority as a saint among sinners’⁸ と述べている。確かに、ジョセフ自身は確固たる思想の持ち主ではなく、彼が語る教義は彼自身の解釈で本来の意味を歪めたものであることが多い。しかし、キャサリンとヒースクリフの発達段階においては、彼の存在は意味深い。子供時代の二人は、ジョセフの独善的な説教の格好の餌食である。(17) 父親さえも見放すほどのいたずら娘であったキャサリンと、そのキャサリンの言うことに従って周囲を困らせていたヒースクリフにとって、ジョセフの説教は我慢できないものであった。ジョセフは、彼らの悪行を見つけては聖書の言いまわしに彼なりの解釈を加え、脅ししながら二人を抑えつけていたのである。彼の行為は、二人が周囲への反逆心を持ち、目の前に広がる現実世界とは異なる場所、つまり、彼ら自身の中に慰めを見出そうとする過程において、重要な役割を担っているのである。

フランシス・ファイク (Francis Fike) は次のように述べている。

By allying himself with Hindley's injustice, by failing to understand the needs and feelings of children—in short, by showing no evidence of redemptive love in his own life—Joseph makes it impossible to accept his religion, which they must reject in order to maintain their integrity as persons.⁹

ファイクが述べるように、キャサリンの父の亡き後、家長となったキャサリンの兄、ヒンドリーに使用人として虐げられている状況では、ジョセフには子供たちの欲求に耳を傾けるような余裕はなかっただろう。彼はむしろ聖書からの独善的な引用を糧に、言うことを聞かない子供たちに

対して自らの不満をぶつけていたのではないだろうか。そのようなジョセフの態度は、キャサリンとヒースクリフにジョセフ自身への反抗心を植え付けるばかりでなく、彼の宗教に対しての反発心も芽生えさせたはずである。結果として、二人はその反発心によって結束力を強めたのだと考えることもできる。つまり、ジョセフは作家エミリの思想とは直接的には交わることの無い人物として描かれてはいるが、キャサリンとヒースクリフが周囲に対する反逆精神を育てる導火線としての役割の一端を担っており、キャサリンが後に到達する精神的な世界観の始まりにも大きく影響している。エミリは、キャサリンとヒースクリフが互いを必要とし、キャサリンが彼女独自の内的世界を形成するまでの過程に道理的な理由を示すことで、作品に物語としての連続性を与えているのである。

次に、ネリーについて考えてみたい。彼女が物語の語り手の役割も担っていることから、ジョセフの場合とは異なり、彼女の物の見方は彼女自身の言葉によってより明確に示されている。ファイクはネリーを ‘the prototype of the nominal Christian who knows and says appropriate things at appropriate times but whose life of independent prudence is little augmented by her religious beliefs’¹⁰ と分析している。ネリーにとって、キリスト教の精神を受け入れることは、キリスト教社会で生活する者として当たり前の行為であり、その社会基準から外れようとするものに対して彼女は理解を示そうとしない。ネリーは自らの親切さを語り、信仰心あふれる行動の数々を読者に顕示するが、彼女がしばしば「信用できない語り手」として批評の対象となることから分かるように、彼女の浅薄な様子は彼女の語りそのものに表われている。ネリーが自ら語る彼女の行動を冷静に考えてみると、必ずしもキリスト教信仰に基づいた博愛心を発揮しているわけではなく、彼女の意地の悪さや判断力のなさも読み取ることができる。ネリーの言葉にはジョセフのような攻撃性はないが、キリスト教徒としての表面的な道義心を繰り返し説くことによって、結果としてキャサリンとヒースクリフの個性を抑圧しているという点では、ジョセフに似た役割を担っていると考えられるのではないだろうか。

キャサリンは、ネリーにエドガーとの婚約を告白した際、彼女が見た夢の話をする。そして、「彼女の天国」はキリスト教の天国とは異なり、地上に存在するものであるということをその夢で理解したのだと語る。すると、ネリーはキャサリンの話に異端的な要素を感じ取って、頑なに続きを聞くことを拒むのである。キャサリンはそれでも話し続け、最終的には、本論のⅠ章で引用したように、‘*I am Heathcliff*’ という表現を用いて、エドガーへの愛情とは異なる、彼女の存在そのものとしてのヒースクリフへの愛をネリーに打ち明けるのだが、ネリーはキャサリンの話に耳を傾けるどころか、半ば嘲笑するような態度で彼女を突き放すのである。

She [Catherine] paused, and hid her face in the folds of my gown; but I jerked it forcibly away. I was out of patience with her folly!

“If I can make any sense of your nonsense, Miss,” I said, “it only goes to convince me that you are ignorant of the duties you undertake in marrying; or else that you

are a wicked, unprincipled girl. But trouble me with no more secrets. I'll not promise to keep them.”(64)

ネリーは、キャサリンの話を ‘folly’ また ‘nonsense’ であると捉え、彼女の考え方は結婚に対して不誠実であると言って、それ以上のキャサリンの話を聞こうとはしない。ネリーは、彼女が身を置くキリスト教社会の常識を超えたものには耳を貸そうとせず、夢の暗示という超現実的な要素との関わりを回避しようとするのである。キャサリンとヒースクリフは、それでも他に代えることのできない相談役としてネリーを頼りにするのだが、ジョセフの支配的な態度と同じように、彼女の言動は既成概念に対して彼らに疑問を持たせ、キャサリン独自の精神性を助長する役目も担っているのではないだろうか。キャサリンとヒースクリフは、ジョセフとネリーの影響によって、既成の宗教的概念から次第に離れていくのである。

ヒースクリフをリヴァプール (Liverpool) から連れ帰り、自分の息子以上に可愛がったキャサリンの父、老アーンショウ氏の死に直面したキャサリンとヒースクリフが、彼らの想像する天国を語り合って互いを慰め合う場面がある。ここで語られる天国はキリスト教的な天国であり、因習的な見方をするネリーでさえも彼らの話には心を動かされたと語っていることは言及に値する。キャサリンとヒースクリフは、この時点ではまだ世間一般に対しての反旗を翻してはいないのである。しかし、その後二人はいたずら心で隣家のスラッシュクロス・グレンジ(Thrushcross Grange)に入り込み、リントン (Linton) 家のエドガーとイザベラ (Isabella) が飼い犬を争って泣いているのを見て嘲笑い、彼らがアーンショウ家より裕福で平和であることを置いても、自分たちの住む嵐が丘 (Wuthering Heights) の方が住み心地がよいと話し合う。この時、キャサリンとヒースクリフは、二人で共に時間を過ごすことに、つまり、彼らが共に存在するということに意味を見出すようになっていくのである。

この後、キャサリンがヒースクリフに精神的な繋がりを求めるようになる一方で、ヒースクリフはキャサリンに肉体的、物質的な繋がりを求めるようになり、この相違が物語の悲劇を生む大きな要因となる。しかし、ジョセフやネリーが示す受け入れ難い宗教観や既成概念、ヒンドリーの制圧する家庭環境、そして彼のヒースクリフに対する虐待が、キャサリンとヒースクリフに彼ら自身の安らぎの世界を求めさせ、二人が排他的な関係を築いていく方向を決定づけたことに間違いはない。

IV

次に、ネリーと共に物語を進めるもう一人の語り手、ロックウッド (Lockwood) について考えてみたい。イゾベル・メイン (Isobel Mayne) は、ロックウッドについて次のように述べている。

Mr. Lockwood is, actually, more like a ‘real’ person than the type of sharply drawn

character that we usually expect in novels. Nelly, it is true, is ‘ordinary’ in many ways, and Edgar and Isabella are more ordinary than Cathy and Heathcliff, but most ordinary of all is Lockwood.¹¹

メインが指摘するように、ロックウッドは他の登場人物よりも現実味を帯びた「普通の」人物である。しかし、単に「普通」であると片付けてしまうのは短絡的ではないだろうか。ロックウッドがジョセフやネリーのように一般大衆の代表の一人として描かれているのは確かだとしても、彼の担った役割は彼ら二人の役割とは異なっているように思われる。ロックウッドは、教育を受けた洗練さを身にまとう紳士であり、ギマトン（Gimmerton）を越えた広い社交界にも通じている。また、彼は訪問者の立場にあり、この土地に根を張ろうという意図もなければ、キャサリンとヒースクリフの葛藤に直接関与することもない。ロックウッドは一般人の代表としての役割を担ってはいるが、彼が実際に表しているのは中産階級、あるいは上流階級の知識人であり、ジョセフとネリーのような労働者階級ではない。ロックウッドの存在は、エミリが彼女の作品を読むと思われる中産・上流階級という知識階級の読者層を意識していたことを示しているのである。

ロックウッドの宗教的な思想は、一見、ネリーと同じような慣習としてのキリスト教義を思わせる。しかし、彼らの信仰への態度は基本的なところで異なっている。労働者階級のネリーにとっては何よりも日々の仕事が優先され、キリスト教は共同体の中で彼女が生活するために不可欠なものではあっても、宗教的な問題を論じて真理を追究しようとする余裕や知性を彼女に期待することはできない。しかし、知識人としてのロックウッドは、慣習としてキリスト教を受け入れているのと同時に、物事を熟視する時間とそのための能力を持ち合わせている。彼の興味関心は日々の些事ばかりにではなく、理知的な思考にも向けられる。ヴィクトリア朝のイングランドにおいて、懐疑思想はその時代の多くの知識人を悩ませた問題であり、ロックウッドが多少なりともその影響を受けていた可能性は多いにある。¹²つまり、ロックウッドが懐疑思想に興味を持っていたとしても不思議はないのである。

ロックウッドが嵐が丘に泊まった晩に見た二つの夢のうち、ここでは一つ目の夢に注目してみたい。

“Sir,” I exclaimed, “sitting here, within these four walls, at one stretch, I have endured and forgiven the four hundred and ninety heads of your discourse. Seventy times seven times have I plucked up my hat and been about to depart—Seventy times seven times have you preposterously forced me to resume my seat. The four hundred and ninety-first is too much. Follow martyrs, have at him! Drag him down, and crush him to atoms, that the place which knows him may know him no more!”
(19)

夢の中で、ロックウッドは熱狂的な信者に混じってジェイベス・ブランダラム (Jabes Branderham) の説教を聞く。しかし、彼はその退屈さに耐えられなくなって、自ら説教師を非難しはじめるのである。*Seventy Times Seven, and the First of the Seventy-first* は彼が眠る前に読んだ本のタイトルである。ロックウッド自身の宗教的な思想の断片をこの場面から読み取ることはできないだろうか。

後にネリーは、ロックウッドに ‘Do you believe such people [Catherine and Heathcliff] *are* happy in the other world, sir? I’d give a great deal to know’ (146) という、異端的とも取れるような質問をする。ネリーは彼らが天国へ行くことができたのかどうかを危ぶんでいるに過ぎないのだが、ロックウッドはネリーが言う ‘the other world’ が、キリスト教の天国とは異なる「死後の世界」という意味にも取れることに反応したのではないだろうか。彼はネリーの問いには答えずに、‘I declined answering Mrs. Dean’s question, which struck me as something heterodox’ (146) と述べて、異端思想への消極性を垣間見せる。しかし、彼の思想は夢の中では何の制約も受けない。彼の不信心は ‘First of the Seventy-First’ の罪となって現れ、ブランダラム師に真っ向から立ち向かうことで、師が体現するキリスト教そのものに疑問を投げかけるのである。その結果、彼は容赦のない罰を受けることになるのだが、この夢の後、彼は自分自身に ‘what was it that had suggested the tremendous tumult, what had played Jabes’s part in the row?’ (19) と問いかけている。この騒動を起こしたのは彼の懐疑心の発露であり、それを暴かれることへの恐怖がブランダラムの役を演じたというのがこの問いへの答えだと考えることもできよう。ここに、当時の知識階級の関心事であった懐疑思想を持つ人物としてのロックウッドが浮かび上がるのである。

しかし、ロックウッドに関して最も興味深いのは、キャサリンとヒースクリフの死後の世界に対する彼の反応である。アーノルド・クルパット (Arnold Krupat) は、ロックウッドについて次のように述べている。

Not only has his behaviour not improved, but so little has he been educated or changed by his experience of Heights and Grange that his imaginative capacities have not really been enlarged either.¹³

しかし、ロックウッドに関しては、振る舞いにも受容能力にも確実に変化が見られる。先にも述べたが、彼はキャサリンとヒースクリフが死後の世界で結ばれたかどうかというネリーの異端的な問いに答えることを一度拒否している。しかし、次に挙げる、作品の最終章でのロックウッドとネリーの会話は、反因習的なものに対する彼の考え方に違いが生じはじめたことを示しているのではないだろうか。

“And who will live here then?”

“Why, Joseph will take care of the house, and, perhaps, a lad to keep him company. They will live in the kitchen, and the rest will be shut up.”

“For the use of such ghosts as choose to inhabit it,” I observed.

“No, Mr. Lockwood,” said Nelly, shaking her head. “I believe the dead are at peace, but it is not right to speak of them with levity.”

At that moment the garden gate swung to; the ramblers were returning.

“*They* are afraid of nothing,” I grumbled, watching their approach through the window. “Together they would brave Satan and all his legions.” (255-56)

キャサリンとヒースクリフの幽霊を見たという羊飼いの少年に出会った後、ロックウッドは、嵐が丘の管理は今後誰に委ねられるのかとネリーに尋ねる。嵐が丘はジョセフに任せて自分はスラッシュクロス・グレンジに移るのだとネリーは答えるが、注目すべきなのはそれに対するロックウッドの反応である。彼は、そこに住みたがっているキャサリンとヒースクリフの幽霊に屋敷を明け渡すのかと問いかけて、ネリーを驚かせるのである。そして、ネリーが型通りの考え方でロックウッドの言葉を即座に否定し、幽霊のことを口にするのを咎める一方で、ロックウッドは、何も恐れる必要のなくなったキャサリンとヒースクリフの幽霊が荒野をさ迷う様子を思い描いている。彼が幽霊の話を持ち出したのは単にネリーをからかうためだったのかもしれないが、少なくとも異端的な事柄を口にするということに関しては、ロックウッドは以前のようなためらいや怖れを感じなくなっている。嵐が丘とスラッシュクロス・グレンジでの体験がロックウッドの心に何らかの変化をもたらしたことに間違いはないのである。

マリアン・ソーマーレンは、ロックウッドが物語を締めくくる最後の語りに関して、‘Lockwood, clearly a mortalist, believes them [Catherine and Heathcliff] asleep in the earth’ と述べている。¹⁴ しかし、キャサリンとヒースクリフの行方について、彼の言葉の真意は明らかではないのである。

I lingered round them, under that benign sky; watched the moths fluttering among the grass; and wondered how anyone could ever imagine unquiet slumbers for the sleepers in the quiet earth. (256)

ロックウッドは、キャサリンとヒースクリフの墓を見ながら、二人が最後にたどりついたと思われる彼ら自身の地上の天国に思いを馳せる。この部分は、読み方によっては、ソーマーレンが読むように「二人が地上に眠っていることを想像できる人などいない」という否定の意味にも取れるが、その前の部分を合わせて考えてみると、「平和な自然に身を置いていると、天国に行かずに地上をさまよう魂があることなど想像できない」とも理解できる。つまり、キャサリンとヒースクリフが天国にいると信じているのか、地上にいると考えているのか、それとも、どちらとも分

からずにとだぼんやりと嵐が丘での出来事を回想しているだけなのか、ロックウッドの語りの真意は定かではないのだ。しかし、一度は異端的な発言を避けた彼が、死後の世界について少なくとも思いを巡らせるようになったという変化を見逃してはならない。ロックウッドは、ジョセフやネリーと同じように因習的な考え方を持つ人物の一人として登場するが、知識階級に身を置く彼は、他の二人の登場人物には実現できない柔軟な思考を自分に許すことができた。アーンショウ家とリントン家の物語をネリーに語るよう頼んだのは好奇心と暇つぶしからであったとしても、ロックウッドはそれによって未知の世界が存在する可能性について考える機会を得たのである。常識的な考えの持ち主が常識を超えた物事に目を向けるようになるのは大きな変化である。ロックウッドは、日常のありふれた世界の外に存在する世界を意識し始め、常識にとらわれた一般人とは一線を画す存在となったのである。

ロックウッドは、ネリーと同じように語り手の役割を担ってもいるが、彼は知識階級の代表としても描かれており、より説得力のある語りを読者層に提示することができる。また、彼はキャサリンとヒースクリフの物語には直接的には関与しない人物であり、他の登場人物には持ち得ない客観的な視点から物事を観察できる立場にある。ゆえに、ロックウッドを作家エミリによって彼女の精神世界を一般世間に代弁する役割を果たすことを期待された人物であると捉えることもできよう。作品のはじめでは、ロックウッドは嘲笑の対象として描かれているが、キャサリンとヒースクリフの死後の世界について考えることによって、霊的な世界が存在する可能性について、そして物質性を超えた精神性から成る世界についてエミリが投げかける疑問を読者に提示し、自らその答えを提示することはなくとも、作家と読者との仲介者としての役割を果たしている。精神世界への、ロックウッドの確信のないアプローチは、作家のエミリ自身が彼女の内的思想を世間に提示することへのためらいを示しているのかもしれない。『嵐が丘』は、エミリの内なる世界を外に発信したいという彼女の「願望」と、それが世間では容認されないであろうという彼女の「諦念」とを多角的に表現しているのである。

V

これまでに述べたように、『嵐が丘』の登場人物が作家エミリの精神世界の具現化において果たす役割は意味深い。キャサリンはエミリが自己を投影した人物としての役割を担い、ヒースクリフはそのキャサリンを追い求め、彼女の精神性を理解するために葛藤を繰り返す。ジョセフとネリーは一般大衆を代表し、彼らの偏見に満ちた宗教観はキャサリンとヒースクリフを結束させ、また、キャサリンに彼女独自の心の安らぎを求めさせるという役目も負っている。そしてロックウッドは、知識階級の人物として、そしてエミリの代弁者として、読者に精神世界の存在についての疑問を示している。

しかし、最後に考えておきたいのは、これらの登場人物がエミリに与えられた役割そのものを超えたところに存在する、この作品の多角的な視点である。エミリの内的世界はキャサリンに大きく投影され、それを理解しようと苦悩するヒースクリフや、彼女の代弁者とも言うべきロック

ウッドによって読者への橋渡しが試みられる。しかし、それに反する勢力が同時に描かれていることから分かるように、彼女の示す精神世界は、作品の中心ではあってもその全てではない。

『嵐が丘』でエミリが提示する彼女の内的世界は、単純に彼女が自分のために形にした慰めの世界ではないのである。あらゆる登場人物を用いて彼女の示す精神世界という主題への多角的なアプローチを許すことにより、エミリは彼女の内的世界を文学作品へと昇華させているのだ。

イヴ・コソフスキー・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) は次のように示唆している。

I want to suggest, although not definitely, a model of *Wuthering Heights* as a therapy, in the course of which Brontë extricates herself from the demand for a relationship of identity with her main character and becomes educated to the necessity for signs and representations.⁵

セジウィックが ‘although not definitely’ と前置きして述べているのは、『嵐が丘』を ‘therapy’ として捉えた場合に浮かび上がる、作家エミリとその作品の関係性である。確かに、作家がその作品を生み出す過程において通った道筋を考えるような伝記的な考察は現代においてはあまり歓迎されず、批評の本筋から外れることを懸念するようなセジウィックの前置きの意味も分からないではない。しかし、それでもセジウィックは、エミリがキャサリンを自分と同一視せずに引き離し、代わりに ‘signs’ や ‘representations’ といった要素を用いて、客観的な視点を作品に与えようとした可能性を指摘している。エミリが登場人物に様々な役割を与えることで実現した彼女の内的世界の具現化は、彼女が作家としての客観性を身につけるための成長過程にあったこと、そして、エミリがその同一化を避ける努力を必要とするほどに、彼女とヒロインのキャサリンの関係が近いものであったことを示しているのである。

また、セジウィックの言葉は、『嵐が丘』批評に関しては、現代においても伝記的なアプローチが未だ重みを持っていることを示すものでもある。エミリ自身の読書体験や時代背景など、彼女の作品に影響していると思われる要素は他にも多く存在する。しかし、『嵐が丘』は、作家エミリの内的世界なくして語ることはできない作品である。エミリ独自の想像的な物語を彼女に創らせたのは、彼女の内からなる想像力にほかならないからだ。特に一般の読者にとっては、『嵐が丘』の伝記的な批評は現代批評よりも強い説得力を持ち、また魅力的なものであるに違いない。そして、これこそが時を経ても依然として内向的なエミリ像が読者に根強く支持される所以でもあるだろう。このエミリ像がなければ、『嵐が丘』は彼らの愛する『嵐が丘』ではなくなってしまうからである。

* この研究は、平成21年度福井工業大学特別研究費の支援を受けた。記して謝意を表する。

注

1. Charlotte Brontë, 'Editors Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*' in Emily Brontë, *Wuthering Heights* (1847), ed. by Ian Jack (Oxford: Oxford University Press), p. 326. 以下、「序文」と『嵐が丘』からの引用にはこの版を用い、すべてページ数のみ括弧内に示す。
2. Katherine Frank, *A Chainless Soul: A Life of Emily Brontë* (New York: Ballantine Books, 1990), p. 152 等を参照。フランクは、'Cast among strangers, she refused to eat. She also as far as possible, refused to speak, refused to join any community beyond that of her sisters and brother, and even with them she had become increasingly remote' と記している。
3. 困難な状況に陥った際、エミリは書くことに慰めを求めたと言われる。フランクは 'From very early on, reading and writing were the most important of all the children's activities, for throughout their evenless, monotonous lives these were their only means of escape' と述べている。Frank, op. cit., p. 46. また、フランクは 'what Emily did require was mental space and privacy, the bedroom to lie awake and write, if she wished, far into the night' と記している。Frank, op. cit., p. 195.
4. Dorothy Van Ghent, 'On *Wuthering Heights*', in Eleanor McNees, op. cit., II, p. 202.
5. F. H. Langman, '*Wuthering Heights*' in Eleanor McNees, op. cit., II, p. 314.
6. Sandra M. Gilbert, 'Looking Oppositely: Catherine Eanshaw's Fall' in Harold Bloom, ed., *Emily Brontë's Wuthering Heights* (New York: Chelsea House, 1987), p. 86.
7. Arnold Kettle, 'Emily Brontë: *Wuthering Heights* (1847)' in Thomas John Winnifrith, ed., *Critical Essays on Emily Brontë* (New York: G. K. Hall & Co., 1997), p. 169.
8. Marianne Thormählen, *The Brontës and Religion* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), p. 82.
9. Francis Fike, 'Bitter Herbs and Wholesome Medicines: Love as Theological Affirmation in *Wuthering Heights*', *Nineteenth-Century Fiction*, 23 (1968), p. 129.
10. Ibid., p. 130.
11. Isobel Mayne, '*Wuthering Heights* and Violation of Class' in Eleanor McNees, op. cit., II, pp. 333-44.
12. Richard Altick は 'The chief religious events to be touched upon in this chapter [VI: Religious Movements and Crises] were in no way removed from the broad intellectual current of the times. On the contrary, they were issues of great moment; and they involved principles for which men of commitment willingly sacrificed careers and endured vilification' と述べている。Richard Altick, *Victorian People and Thought* (New York: W. W. & Norton, 1973), p. 203.
13. Arnold Krupat, 'The Strangeness of *Wuthering Heights*', *Nineteenth-Century Fiction*, 25 (1970), p. 276.
14. Thormählen, op. cit., p. 108.
15. Eve Kosofsky Sedgwick, *The Coherence of Gothic Conventions* (New York: Mathuen, 1986), p. 113.

(平成 22 年 3 月 31 日受理)